

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 平仮名字体の成立過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-02-27 キーワード (Ja): 平仮名成立史, 仮名書道, 平仮名字体, 字形の簡略化 キーワード (En): 作成者: 中山, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001372">https://doi.org/10.57529/0002001372</a>

# 平仮名字体の成立過程

中山陽介

キーワード

平仮名成立史 仮名書道 平仮名字体 字形の簡略化

## 要旨

平仮名は漢字が崩されて成立したが、平仮名の各字体が漢字のどのような形からどう崩れて出来たかの具体的な過程は、従来、詳しく検証されてこなかった。本稿では、以前筆者が論じた字形の簡略化の分析方法を更に深め、十世紀の仮名資料に常用される基本的な平仮名の字体全般について、成立過程を詳しく考察する。まず、平仮名の成立過程について筆者のこれまでの研究成果を要約した上で、中国古文字学で論じられている漢代草書の成立時の簡略化法則と比較しながら、平仮名の分析方法を確認する。次に、平仮名成立途上の段階を示す現存資料を用いて、字源の漢字字体から平仮名の形になるまでの変遷過程を図示し、各字の各段階に見られる形の変化が、どのような変形法によっているかを、細かく分析する。筆者が以前提唱した平仮名の簡略化の六法「繋ぎ・接ぎ・省き・約め・縮め・均し」を更に細分化した項目に当てはめながら、平仮名の字体が確立するまでにこれらの法則がどのように働いているかを草書とも比較しながら考察し、次のようなことを明らかにする。第一に、平仮名には筆順の変化は見られないこと。第二に、草書の成立時に重要な役割を

担った、字の一部分を省き去る「省法」などが平仮名にはあまり見られないこと。第三に、「画を短縮する「縮め」の法が、漢字本来の結構を大きく変化させる効果を持ち、漢字字形からの乖離がこれによって大きく進められていること。第四に、転折を均して曲線を多くする「均し」の法によって仮名の筆画の性質が変化し、平仮名独特の丸みを持った書法が確立すること。以上によって、平仮名の簡略化の原理が草書とは大きく異なり、「縮め」「均し」が平仮名独特の法則として、平仮名成立の上で重要な働きをしていることを論じる。

## 一 平仮名の字体の確立

本稿では、平安時代に確立した平仮名の字体が、元の漢字からどのように崩されて成立したかを考察する。

筆者はこれまで、平安時代の仮名資料の分析を元にして、平仮名の成立過程の研究を進めてきた。その際、平仮名の成立が何を以て判定されるべきかを考え、平仮名の成立は、字形・筆画・連綿という三つの要素において、漢字に無かった平仮名独特の性質が獲得されることが重要であることを提示した<sup>1</sup>。すなわち、字形が簡略化されて元の漢字から乖離した模範を持つようになる「字形の簡略化」、字を構成する筆画が直線よりも曲線を主体とするようになる「筆画の円転化」、仮名独特の連綿が常態化する「連綿の定式化」である。「連綿の定式化」と「筆画の円転化」については、その発達の過程や平仮名が成立する上での意義を既に詳しく論じたが<sup>2</sup>「3」、<sup>3</sup>「字形の簡略化」については、現象が個々の字にわたり、細かい分析が必要になるため、概略を示しただけで十分な検討が行えていなかった<sup>4</sup>。そこで本稿では、以前論じた内容を拡張させて、個々の平仮名字体の成立過程を分析し、平仮名の独特の字体がどのような簡略化によって成立したかを考察する。

なお、平仮名の形を論じる上で、本稿では「字形」や「字体」という用語を使うが、「字体」は、ある字を書く際に念頭に置かれている、特定の模式的・理念的な書き方の型（典型）を指し、「字形」は、字の形という程度の広い意味で使い、「字体」を含めた、字の書き方や現れる形全般を指すこととする。漢字の行草体や平仮名は、点画の連続や連筆の変化が随意に行われ、実現する形は多様であるが、そうした形の違いが見られても、特定の典型をその書体一般の筆法に従って変形させたと解釈できる例であれば同一の字体の変種と見なす。平仮名の成立に至るまでには、ある特定の漢字字体の崩しの範囲でしかなかった書き方が、段々と逸脱を進めながら仮名特有の書き方と

して慣習化し、一個の典型と見なされるようになることで、平仮名字体の確立に至った、と見なされる。

## 二 平仮名字体の成立過程の概略

まず、平仮名が成立するまでの「字形の簡略化」の過程について、筆者がこれまで論じてきたことに基づいて概略を述べる。

一般的に平仮名の字の成り立ちは、楷書体で書かれた真仮名（万葉仮名）が、使われているうちに段々と崩されて草書体の「草仮名」となり、それが更に崩されて平仮名になったというように言われることが多い。しかし、こうした説明は十分でない。筆者は以前、このような通説を検証して、平仮名の字源について、次のことを論じた「5」「6」。

(イ) 初期の平仮名に常用される字と、上代の木簡や文書の真仮名で常用される字とは、元になる漢字の字種が一致しないものも相当数あり、両者の歴史的な連続性は限定的である。

(ロ) 平仮名には、楷書の形からは成り立ちが説明できない草書独特の形に由来する字が多く含まれるが、上代は漢字でも草書が書かれることは稀で、真仮名の遺品もほとんどが楷書や楷書崩しの行書的な形で書かれている。上代の真仮名の常用字と平仮名の常用字とは、字種が一致してもそのような字体上の連続性の無いものが相当数ある。

(ハ) イ・ロの通り、常用された字種・字体の種類に不一致が多いことからして、平仮名の形は、上代の真仮名が使われているうちにそのまま書き崩されて成り立ったわけではない。

(ニ) 日本で草書が普及するのは、唐から晋唐の書法（王羲之の書法を基盤とする東晋や唐の様式）が本格的に取り入れられた平安時代初期以降であるから、漢字の形を崩し始めて平仮名の発達が始まったのは、それ以降に絞られる。

(ホ) ただし、平仮名の中には、平安時代初期に受容された草書だけでなく、朝鮮半島に由来する上代以来の楷書の形や平安時代に日本で独自に生まれたとおぼしい形などに基づく字もあり、総じて平安時代初期に行われた書き方が広く採用されている。

(ヘ) 上代以来の字体に由来する平仮名でも、上代のうちは形が漢字の規範から逸脱することではなく、平安時代になって初めて簡略化が起こり、仮名独特の形に変化していった。

(ト) 平仮名が奈良時代以前には発達せず、元の漢字の形が崩されはじめたのが平安時代になってからのことであるのは、平安初期に定着した草書の書法から字の形を崩すという手法を学び取ったからではないか。

従って、平仮名の字源を示す際、今日の活字体や古代以来の一般的な楷書の字体を取り上げるのは不十分で、平安時代初期当時に行われていた書き方の中から適当なものを見出だす必要がある。たとえば、「ち」「て」といった字は、「知」「天」の楷書からは、結構や筆順の違いが大きいため崩し方が説明できず、草書の一般的な字体(知<sup>ち</sup>、天<sup>て</sup>)によって初めて適切に説明できる。

なお、従来の用語では、真仮名(万葉仮名)の漢字形が崩されてから平仮名になるまでの中間の段階を「草仮名」と称し、十<sup>し</sup>十一世紀頃に書かれた「秋萩帖」などをその例と見なすことも多かった。しかし、「秋萩帖」のような十世紀以降に書かれた「草仮名」は、漢字の行草の字体を意図的に使った装飾的な書体であり、平仮名成立以降に流行した様式である。そこに見られる字体は平仮名の前身ではない。本稿では、それとの混乱を避けるため、実際に平仮名の前身にあたる中間的な形態の段階は「草仮名」とは呼ばず、筆者が今まで使ってきた仮称に同じく「半平仮名」と称して、両者の区別を明確にする。<sup>1)</sup>

次に、字源となる漢字が崩されて平仮名の形が出来るまでの「字形の簡略化」の具体的な過程について、筆者は以前、京都の西三条第跡(藤原良相邸宅跡)から出土した九世紀後半頃の仮名墨書土器の仮名字形を分析する上で、中国古文字学の手法を参考にして、平仮名が成立するまでの字形変化の法則を六つにまとめた「4」[1: 70-71頁]。今、旧稿の命名に仮に漢語を付して示す。例示の模写は上が元の漢字の形、下が平仮名の形で、該当する変形部分に点を付した。

- ・均し(平均) …… 画の転折をなだらかにし、一息で書ける画にする …… の乃乃のの …… ち知<sup>ち</sup>ち<sup>ち</sup>
- ・縮め(短縮) …… 長い画を短い画に、もしくは画を点にする …… く久久く …… た太<sup>た</sup>た<sup>た</sup>
- ・繋ぎ(連繋) …… 離れた点や画を繋いで一画にする …… ほ保<sup>ほ</sup>保<sup>ほ</sup> …… の乃乃の
- ・接ぎ(接合) …… 離れた画どうしを接触させて転折にする …… く久久く …… ひ比<sup>ひ</sup>比<sup>ひ</sup>
- ・省き(省去) …… 遠回りになる画を省いて書かない …… あ安<sup>あ</sup>あ …… ゆ由<sup>ゆ</sup>由<sup>ゆ</sup>
- ・約め(簡約) …… 複雑な箇所を点や運筆の軌道に代替させる …… ま末<sup>ま</sup>ま …… る留<sup>る</sup>留<sup>る</sup>

そうして、字源の漢字と完成後の平仮名の形とを比較して、どの箇所にも右のどの種類の変化が起こっているかを一つ一つ指摘しながら、

個々の平仮名字形の成り立ちを分析した上で、平仮名の発達過程を考えた。すなわち、この六法の内、特に「繋ぎ」によって連筆の力が省かれた後、「均し」によって転折が無くなり画数が格段に減ること、平仮名らしい字形が確立し、それとともに、連綿が発達し（連綿の定式化）、筆画全体が曲線を主体とするものになった（筆画の円転化）、という過程が考えられることを論じた。

しかし、その際には、対象の墨書土器に書かれた仮名の分析を目的としたので、取り上げる字体は平仮名の全体には及ばず、簡略化の手法一つ一つを詳しく考察するには至らなかった。そこで本稿では、九世紀から十世紀にかけての仮名資料を用いてその字形の沿革を詳しく分析することで、改めて、平仮名の字体がどのような簡略化の原理で発達したのかを考察する。

### 三 字形変化の分析方法

平仮名の成り立ちを考える上では、草書の成り立ちが比較対象として参考になる。

中国の陸錫興は漢代の草書の形成を分析し、元の字体からの変化を「省法」「簡法」「連法」という三つの手法に分類している<sup>[7]</sup>。今、陸錫興『漢代簡牘草字編』『漢字形體史』に示された漢代草法の概略を示すと次のようになる<sup>[7]</sup>「8…506～507頁」。

(一) 省法 …… 他に置き換えることなく、一部の点画や部品をそのまま省略する

1・点や画を省略する (省点画) …… 里 **王** 車 **車** (日↓口)

2・部品を省略する (省部件) …… 苈 **茶** (艸↓艸) 甚 **宀** (上部) 等 **寸** (上部) 孫 **𠂔** (右上部)

(二) 簡法 …… 複雑な形を簡単な形に置き換える

1・画や部品を点にする (点法) …… 器 **𠂔** 卿 **𠂔**

2・字源に無関係な代用符号に置き換える (用代号) …… 要 **𠂔** 與 **𠂔**

(三) 連法 …… 元からあった点画を繋ぎ合わせて一筆にする

1・筆画を連書する (連書筆画) …… 急 **𠂔** 夫 **𠂔**

2・部品を連書する (連書部件) …… 功 **𠂔** 奉 **𠂔**

佐野光一も、こうした中国古文字学の理論に基づき、簡略・連続・省略(簡・連・省)の三つを分析の中心に据えて、漢代の草書や今草(後漢以降の草書)の発達を詳しく分析している[9][10][11]。旧稿では、佐野光一の論を参考にしつつ、各平仮名字体と字源の漢字字体との間に認められる形の差異を指摘し、それが簡・連・省のどの法則によって変化しているかを分類した上で、法則を更に分けることで、先の六つの法則をまとめたのであった。すなわち、「簡」を二つに分けて「縮め」「均し」に、「連」を二つに分けて「繋ぎ」「接ぎ」に、「省」を二つに分けて「約め」「省き」に分類した[4]。

ただし、この対応付けは陸錫興の論とも考え合わせると検討の余地がある。たとえば、「簡」に当てた平仮名の「均し」は屈曲する部分を持たない曲線や直線にする手法であるが、陸錫興の挙げる項目の説明には直接当てはまるものが無く、転折を無くすという意味では「省」に当てることが出来る。また、「約め」を「省」に分類したが、陸錫興の説明に合わせた場合、簡単な形に代替することから「簡」の方が適当であろう。

そもそも、これらの草書成立の説は、漢代の草書、いわゆる「草隸」や「章草」と呼ばれるものの成り立ちを論じたものである。象形的な篆書に由来する複雑な構成を持った隸書(古隸)の文字を簡略化した草隸(章草)と、既に大胆な簡略化が実現している草書を多く採用しそれを更に簡略化している平仮名とは、簡略化の方向は自ら違ってくる。たとえば、漢代の草書の形成過程では、偏旁や点画を丸ごと除き去る「省法」が画数を大幅に減らす重要な働きをしており、陸錫興はこれを草書中で最も重要な法則だとしているが、平仮名には少ない。「簡法」も、隸書の複雑な部分を単純な形に置き換えてしまうところにその効果があるが、平仮名では、字源の中心を占める草書の字体が既に単純化された形をしているため、同じような大胆な「簡法」は見られない。

前掲の拙案は草書の三法そのままではなく、それを手がかりとしながら、実際の平仮名字形の分析に基づいて、簡略化の法則を平仮名独自に分類したものである。ただし、字源の漢字と完成後の平仮名を比較してその差異を取り出すという方法をとったため、その中間がどのような過程を辿ったかは十分な検討を行っていないかった。

佐野光一も筆者とは別に、草仮名と平仮名との比較によって、連続・省略・簡略・筆順変化の観点から、平仮名になるまでの字形変化を十九項目に分類しているが[12]、字源に十世紀以降の草仮名の字形を措定していることに問題が残り、また、筆者と同様、中間の具体的な変形過程にまでは立ち入っていないため、字源と平仮名字体との間の変化をどう解釈するかに検証の余地がある。

そこで、次節から、改めて九世紀から十世紀までの現存の仮名資料の中に見出だされる字例によって仮名字形の変遷表を作り、各字がどのような簡略化を経ているかを分析する。これによって前掲の平仮名の変形法の六つを更に細かく分類して、平仮名字形成立の過程でどのような簡略化の手法が使われているかを詳しく考察する。

#### 四 仮名字形の変遷

次に掲げる「仮名字形変遷表」に、十世紀の基本的な仮名字体の成立過程を図示した。上の二段に字源に当たる漢字の例を掲げ、三段目以下に仮名段階の字形を示した。略号と出典は表末に掲げた通りである。字例はすべて筆者による摸写である。出典につき、漢字の「宮町遺跡出土あさかやま木簡」(≡宮町)以外の例、及び仮名の「高野切古今和歌集」(≡高)、「粘葉本和漢朗詠集」(≡粘)の例は字典に拠り、それ以外は各種公刊の図版に拠った。字典は『角川書道字典』[13]、『王羲之書法字典』[14]、『日本名跡大字典』[15]、『空海大字典』[16]、『改訂新版 日本古代木簡字典』[17]を参照した。

表中、字の変形が起こっている部位に丸数字を付して、その下に六法の内どの変形が起こっているかの私見を記した(次節参照)。表記は変形法の頭文字を略号としたが、見やすさのため、「繋ぎ」は「車」、「縮め」は「宿」で表した。同一番号中に「・」で繋げて複数挙げてあるのは、同一箇所にも同時もしくは順次に起こっている変形である。「え江」の二丁目のように縦線で割ってあるのは、異なる変形法による分岐が見られるもので、縦線の右を甲、左を乙とし、それぞれの変形に該当する字例を、その下に【甲】【乙】の表記を冠して示した。なお「う字」「け介」「み美」のように現存資料から変化の過程を辿りにくい場合「？」と記した。

上二段の字例は、字源に相当する漢字の例である(真仮名としての用例を含む)。一段目は唐以前の中国の例を中心に典型的な形を挙げ、二段目には平安初期(九世紀)以前の日本の例もしくは唐以前の中国の比較的崩れた形を挙げた。略号を括弧で括った資料は、平安初期以前の適例が見当たらず、平安中期(十世紀)以降の例から補ったものである。漢字の直下に示した変形内容の記述は、一段目に掲げた最も典型的な形を出発点として記述するのを基本としたが、実際には、二段目に挙げたような崩した形から始まったと思われるものも多い。従って漢字の直下に記載した変形内容には、平仮名発達の進行を意味しない、漢字の崩しの範囲に留まる過程も含まれる。

【表】仮名字形変遷表

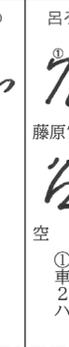
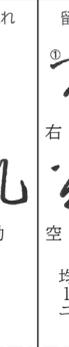
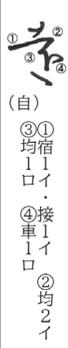
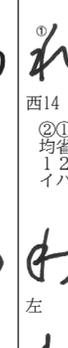
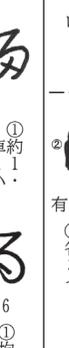
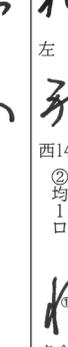
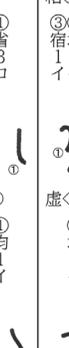
介け 空 ?	久く 右 最	支き 献 空 ①接1ハ	幾き 伊都 ②①車車21イ	可か 孫 空	加か 孫 空 ①車2イ	於お 屏 空	江え 伊都 ③①接車11イ口 ④②接車2ホ・均1口	衣え 空 ①均1口	宇う 昇仙 杜家 ?	以い 智 空 ①均車11イ・ ②均車21イ・	安あ 孫 空 ③①接省11ハイ ②省1口
介 (自) 左 北○ 粘○	久 円 ①接宿11イ・ 西14 ①宿1イ 因◇ 粘○	支 (自) ①均1口 因◇ 虚◇ 粘○	幾 西15 ①均1イ 虚◇ 粘○ ①約2・宿1口 虚◇	可 有 ①宿2 左 虚◇ 粘○	加 有 ①均1イ 西14 虚◇ 粘○	於 有 虚◇	江 (自) ①均1イ   ①均2イ 【甲】 是 虚◇ 【乙】 虚◇	衣 円 ①接宿11イ・ 粘○	宇 因◇ ①均1口 虚◇ 粘○	以 有 ①均1イ 虚◇ 粘○	安 西14 粘○

<p>曾そ ① 右 ①接2口</p>	<p>世<sub>2</sub>せ ① 屏風 空 ①宿1イ</p>	<p>世<sub>1</sub>せ ① 空 ①均2イ</p>	<p>春す ① 賀 ① 空 ②①車車11ロイ</p>	<p>數す ① 右 ②①車車11ロイ</p>	<p>須す ① 右 ②①車車21ホロ</p>	<p>之し ① 孫 ②①均均21ロ</p>	<p>散さ ① 孫 ③①接均11ハハ ②均2イ</p>	<p>左さ ① 智 ① 空 ①均均21イ ②均2イ・接1イ・</p>	<p>己こ ① 智 ②①均均11イ</p>	<p>計け ① 右 ①省1口</p>
<p>① ②均1イ 【乙】 ①均1口 是 粘○</p>	<p>【乙】 有 虚◇ ①均2イ 高10</p>	<p>虚◇ 粘○</p>	<p>是 ①接2イ 粘○ ①均2イ</p>	<p>(自) 左 ①均2イ 西 高10</p>	<p>高30 ①均1ハ 粘○ ①均3</p>	<p>円 ①車1ロ 西14 粘○ ①均3 虚◇ 粘○</p>	<p>因◇ 粘○</p>	<p>な ①均2イ 粘○ 粘○ 粘○</p>	<p>な ①均2イ 粘○ ①宿1イ 因◇ 粘○ ①宿2 虚◇</p>	<p>虚◇ 粘○</p>

仁に 屏風 空	尔に 孫 空 ①接1イ	那な 孫 空 ②①均約11ハ	奈な 空 ③②車均11イロ ②①均接11ロイ	止と 空	天て 孫 ①均1ロ	天て 孫 空 ①接2イ	徒つ 孫 (紀家) ②①均接11ハイ	ツつ 宮町 正乙 ①車2ロ	知ち 右 空	太た 右 空	多た 孫 空
に 粘○	尔 <sup>①</sup> 有 ①宿1イ	那 <sup>①</sup> 虚◇ ①省3ロ	奈 <sup>①</sup> 有 ③①均宿22ロ ②車2ホ	止 <sup>①</sup> 有 ②均2イ 【甲】 ①車1ロ ②均2イ	天 <sup>①</sup> 有 ①車2ホ	天 <sup>①</sup> 有 ①車2ホ ②①均接21ロ	徒 <sup>①</sup> 是 粘○	ツ <sup>①</sup> 西15 左 ①均1ニ	知 <sup>①</sup> (自) ②①均宿11イロ 虚◇	太 <sup>①</sup> 有 ①宿2 西8	多 <sup>①</sup> (自) ①均1ロ 有 ①均1ロ ①接2ロ 粘○
	尔 <sup>②</sup> 有 西14 ②①車2ホ・均2ロ	那 <sup>②</sup> 粘○	奈 <sup>②</sup> 西14 ②①均2イ ②車2ホ・均2イ	止 <sup>②</sup> 有 【甲】 ①車2ホ ②均2イ ②①均均22イイ 因◇	天 <sup>②</sup> 有 ③①宿2イ ②宿2	天 <sup>②</sup> 有 ③①宿2イ ②宿2	徒 <sup>②</sup> 是 粘○	ツ <sup>②</sup> 左 ①均1ニ 因◇	知 <sup>②</sup> (自) ②①均宿11イロ 粘○	太 <sup>②</sup> 有 ①宿2 西8	多 <sup>②</sup> (自) ①均1ロ 有 ①均1ロ ①接2ロ 粘○
	尔 <sup>③</sup> 有 西14 ②①車2ホ・均2ロ	那 <sup>③</sup> 粘○	奈 <sup>③</sup> 西11 粘○	止 <sup>③</sup> 有 【乙】 ①車2ホ ②均2イ 粘○	天 <sup>③</sup> 有 ③①宿2イ ②宿2	天 <sup>③</sup> 有 ③①宿2イ ②宿2	徒 <sup>③</sup> 是 粘○	ツ <sup>③</sup> 左 ①均1ニ 粘○	知 <sup>③</sup> (自) ②①均宿11イロ 粘○	太 <sup>③</sup> 有 ①宿2 西8	多 <sup>③</sup> (自) ①均1ロ 有 ①均1ロ ①接2ロ 粘○
	尔 <sup>④</sup> 有 西14 ②①車2ホ・均2ロ	那 <sup>④</sup> 粘○	奈 <sup>④</sup> 西11 粘○	止 <sup>④</sup> 有 【乙】 ①車2ホ ②均2イ 粘○	天 <sup>④</sup> 有 ③①宿2イ ②宿2	天 <sup>④</sup> 有 ③①宿2イ ②宿2	徒 <sup>④</sup> 是 粘○	ツ <sup>④</sup> 左 ①均1ニ 粘○	知 <sup>④</sup> (自) ②①均宿11イロ 粘○	太 <sup>④</sup> 有 ①宿2 西8	多 <sup>④</sup> (自) ①均1ロ 有 ①均1ロ ①接2ロ 粘○

末ま <sup>①</sup> 末 孫 <sup>②</sup> 末 空 ②① 車宿 11 イイ	保 <sub>2</sub> ほ <sup>①</sup> 保 右 <sup>①</sup> 均 1 口	保 <sub>1</sub> ほ <sup>②</sup> 保 伊都 <sup>③①</sup> 車均 21 ホ口 <sup>②</sup> 車 1車 イイ	平ハ <sup>①</sup> 平 平城宮 <sup>①</sup> 接 1 イ	不 <sub>2</sub> ふ <sup>①</sup> 不 右 空	不 <sub>1</sub> ふ <sup>①</sup> 不 智 空	比ひ <sup>①</sup> 比 右 最 <sup>①</sup> 均接 11 口ハ ・	者は <sup>①②</sup> 者 右 <sup>②①</sup> 接宿 21 イイ ・ 接 1 イ	波は <sup>①②</sup> 波 右 空 <sup>②①</sup> 省車 21 口口	能の <sup>①</sup> 能 孫 空	乃の <sup>①</sup> 乃 智 空	祢ね <sup>②③④</sup> 祢 (秋萩) <sup>③①</sup> 車車 22 ホホ <sup>④②</sup> 均省 22 口口	奴ぬ <sup>①</sup> 奴 右 杜家 <sup>②①</sup> 均接 21 イハ
<sup>①</sup> 末 有 <sup>②①</sup> 均車 22 口ホ	<sup>①</sup> 保 (自) <sup>②①</sup> 宿均 11 口口	<sup>①</sup> 保 北〇 <sup>①</sup> 均 2 口	<sup>①</sup> 平 円 <sup>①</sup> 均 1 イ	<sup>①</sup> 不 虚◇ <sup>②①</sup> 接宿 11 口イ ・ 接 1 イ	<sup>①</sup> 不 有 <sup>①</sup> 均 2 イ	<sup>①</sup> 比 有 <sup>①</sup> 接 2 イ	<sup>①</sup> 者 虚◇ <sup>①</sup> 宿 1 イ ・ 接 1 イ	<sup>①</sup> 波 有 <sup>①</sup> 省 1 イ	<sup>①</sup> 能 な <sup>③①</sup> 車省 22 ホイ <sup>④②</sup> 均均 22 イイ	<sup>②</sup> 乃 有 <sup>②①</sup> 均車 22 イホ	<sup>①②③</sup> 祢 是 <sup>③①</sup> 均車 22 イハ <sup>②</sup> 均 2 イ	<sup>①</sup> 奴 (自) <sup>①</sup> 接 1 ハ
<sup>①</sup> 末 粘〇 <sup>①</sup> 約 2	<sup>①</sup> 保 虚◇ <sup>①</sup> 均 2 イ	<sup>①</sup> 保 虚◇ 粘〇	<sup>①</sup> 平 虚◇ <sup>①</sup> 均 1 イ	<sup>①</sup> 不 粘〇 <sup>①</sup> 車 1 口	<sup>①</sup> 不 粘〇 <sup>①</sup> 車 1 口	<sup>①</sup> 比 因◇ <sup>①</sup> 接 1 イ	<sup>①</sup> 者 虚◇ <sup>①</sup> 宿 1 イ ・ 接 1 イ	<sup>①</sup> 波 有 <sup>①</sup> 均 1 口	<sup>①</sup> 能 虚◇ <sup>①</sup> 均 1 口	<sup>①</sup> 乃 左 <sup>①</sup> 均 1 イ	<sup>①②③</sup> 祢 是 <sup>③①</sup> 均車 22 イハ <sup>②</sup> 均 2 イ	<sup>①</sup> 奴 粘〇
<sup>①</sup> 末 因◇ <sup>①</sup> 宿 1 口	<sup>①</sup> 保 虚◇ 高1〇	<sup>①</sup> 保 粘〇	<sup>①</sup> 平 因◇ <sup>①</sup> 均 1 口	<sup>①</sup> 不 粘〇 <sup>②①</sup> 車接 11 イハ	<sup>①</sup> 不 粘〇 <sup>②①</sup> 車接 11 イハ	<sup>①</sup> 比 粘〇	<sup>①</sup> 者 北〇 <sup>②①</sup> 均均 21 口 粘〇 <sup>②①</sup> 均均 21 イ口	<sup>①</sup> 波 西8 <sup>①</sup> 接 1 ハ 粘〇 左	<sup>①</sup> 能 粘〇	<sup>①</sup> 乃 粘〇	<sup>①②③</sup> 祢 因◇ <sup>②①</sup> 省均 31 口口 粘〇	<sup>①</sup> 奴 粘〇
<sup>①</sup> 末 粘〇			字源は「部」省文									



遠を  智 ①均1口	乎を  右 ①宿2 ②車2ホ ③車1イ・宿2 ④宿1イ ⑤宿1イ	爲み  右 空 ①車接1ハハ ②車1ハハ	和わ  智 藤原宮 空 ①車2ハ	呂ろ  藤原宮 空 ①車2ハ	礼れ  王勃 空 ①車2ハ	留る  右 空 ①車2ハ ②車2ハ ③車2ハ ④車2ハ ⑤車2ハ	利り  右 空 ①車2ハ ②車2ハ ③車2ハ ④車2ハ ⑤車2ハ
 哭澄 ①均1口	 最 ①宿2 ②車1イ・宿2 ③車1イ ④宿1イ ⑤宿1イ	 高2〇 ①省2イ	 西14 ①均1イ ②均2ハ ③均2ハ	 是 因◇ ①均1イ	 有 ①均2イ ②均2イ ③均2イ	 ①約1ハ ②均2イ ③均2イ	 有 ①省2ハ ②省3ハ
 因◇ ①均2イ	 西14 ①接2イ	 粘〇	 左 北〇 粘〇	 是 因◇ ①均1イ	 西8 ①均2イ	 西16 ①均2イ	 粘〇 ①宿1口 ②均2イ ③均2イ
 粘〇	 虚◇ ①均2イ	 粘〇	 北〇	 粘〇	 西14 ①均2ハ ②均2ハ ③均2ハ	 粘〇 ①宿1イ ②均2イ ③均2イ	 粘〇 ①均2イ

【中国漢字】 ●右Ⅱ東晋・王羲之（右軍）「十七帖」集王聖教序「孔侍中帖」等 ●獻Ⅱ東晋・王獻之「鄱陽婦鄉帖」 ●智Ⅱ隋・智永（谷氏本真草千字文）  
 ●孫Ⅱ唐・孫過庭「書譜」 ●屏風Ⅱ唐・伝太宗「屏風書」 ●昇仙Ⅱ武則天「昇仙太子碑」 ●賀Ⅱ唐・賀知章「草書孝經」  
 【日本漢字・平安初期以前】 ●藤原宮Ⅱ藤原宮木簡 ●平城宮Ⅱ平城宮木簡 ●宮町Ⅱ宮町遺跡出土あさかやま木簡 ●杜家Ⅱ光明皇后「杜家立成雜書要録」  
 ●王勃Ⅱ「王勃詩序」 ●正甲・正乙Ⅱ「正倉院文書万葉仮名文書」甲・乙 ●空Ⅱ空海「三十帖冊子」風信帖「金剛般若經開題」灌頂曆名「座右銘」  
 ●最Ⅱ最澄「久隔帖」空海將來目錄 ●伊都Ⅱ伝橘逸勢「伊都内親王願文」 ●哭澄Ⅱ嵯峨天皇「哭澄上人」 ●臨書譜Ⅱ伝空海臨「孫過庭書譜断簡」  
 【日本漢字・平安中期】 ●（紀家）Ⅱ大江朝綱「紀家集」 ●（秋秋）Ⅱ「秋秋帖」  
 【半平仮名】 ●有Ⅱ藤原有年「讚岐国司解端書（有年申文）」 ●西Ⅱ平安京西三条第跡出土仮名墨書土器 ●なⅡ平安京左京四条一坊二町出土難波津歌木簡  
 ●円Ⅱ「円珍病中言上書」 ●左Ⅱ平安宮左兵衛府侍從所間出土和歌墨書土器 ●是Ⅱ醍醐寺五重塔天井板落書 ●（自）Ⅱ「自家集切貫之集」  
 【平仮名】 ●因◇Ⅱ「因幡国司解案紙背仮名消息」 ●虚◇Ⅱ「虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息」 ●北〇Ⅱ「稿本北山抄紙背仮名消息」  
 ●高〇Ⅱ「高野切古今和歌集」第1〜3種 ●粘〇Ⅱ「粘葉本和漢朗詠集」

三段目以下は、半平仮名・平仮名の字例を形の変化を追える順序で排列した。資料略号の後ろに「○」をつけたものは、十世紀末から十一世紀中頃の平仮名完成段階の資料で、平仮名の典型的な形を示すものである。「◇」をつけたものは、書法的にも字形的にもほとんど平仮名といってよいが古い形を留めた字を一部に含んだ資料である。何も符号のついていないのが、九世紀後半から十世紀前半にかけての半平仮名資料であるが、採用した字例は、字形が図版からはっきり読み取れ、釈読に疑いがほぼないと思われるものに限った。依拠すべき現存資料が少なく、字形の沿革を説明するのに十分な例数が揃っていないとはいえないが、半平仮名の段階の資料は、字形の簡略化の度合いが年代の前後と必ずしも一致せず、比較的新しい年代の資料に古い形が残っていることがあるため、それによっておおよその過程を説明できる場合も多い。そこで、ここでは厳密に資料の年代順に従わず、形の繁簡に沿って字例を排列した。「自家集切貫之集」（自）は平仮名の成立後に書かれたものであるが（十世紀～十一世紀書写か）、平仮名の形の変遷を跡づける上で有用になるため「18」、半平仮名資料に準じて排列した。

## 五 字形変化の考察

表の字の個々の変形部分を分析して、改めて平仮名の簡略化法を、以下の【一】～【六】のようにまとめ、六法それぞれを更に細分した。算用数字の項目を更に細分したイロハや十干の項目は、厳密な分類基準はなく、おおよその共通性のあるまとまりで括ったものである。例示は前掲「仮名字形変遷表」から網羅的に抜き出して変形の前と後の形を示し、該当の変形箇所<sup>18</sup>に点を付した。括弧で括ってある例は、表中の漢字の例に見られる変形、つまり仮名独自とは限らない変形であることを示す。

### 【一】繋ぎ（連繋）

(1) 点画を合して一画にする

(イ) 二点を連続して一画にする（甲…隣り合う二点を／乙…縦画を跨ぐ二点を）

（甲） 保保<sub>保</sub>保

〔乙〕幾々き 奈奈奈 奈奈奈 尔尔尔 不1小女 保1保保 末末末 (平乎)

〔ロ〕点から画へ連続して一画にする〔甲…直線的な画へ／乙…転折のある画へ〕

〔甲〕江江江 之じし (須江江) (數江江) (波波波) 不1不不 〔乙〕止とと

(2) 点画を連続する

〔イ〕二点を連続する (以以以) (加加加) 幾々き

〔ロ〕三点を連続する (ツツツ) (留留留)

〔ハ〕点から画へ連続する 〔甲…左から縦画へ／乙…上から横画へ〕

〔甲〕美みみ (利2利利) (呂呂呂) 〔乙〕祢ねね 无ええ 毛1毛毛 礼れれ 遠々々

〔二〕画から点へ連続する (利2利利)

〔ホ〕画から画へ連続する 〔甲…横画から横画へ／乙…交叉する縦画から横画へ／丙…交叉する縦画から斜画へ／丁…その他〕

〔甲〕天々々 (毛1毛) 毛2毛毛 (平乎)

〔乙〕奈々々 奈々々 尔尔尔 祢祢祢 保1保保 末末末 能能能 毛1毛毛

〔丙〕世2世々 止とと 〔丁〕江江江 須江江 世2世々 乃乃乃 由由由

点や画を連続させる手法で、複数の点を合併して画にする手法(1)と、単に点画を連続させる手法(2)とが見られる。運筆の労力を省く効果を持ち、点画を切り離さずに続け書きすることで、筆の上げ下げや起筆・収筆の動作が省かれて、その分、調子よく楽に書くことができる。漢字の行草の速書きでも一般的に見られる手法であり、点画が連続すること自体は仮名独特の簡略化とは言えないが、繋がった書き方が慣習化することで、それを土台に「均し」などの更なる簡略化が進められる、という点が、行草書法とは異なる。

【二】接ぎ(接合)

(1) 接触しない離れた画を互いに接合する

(イ) 位置を近づけて(甲…位置の移動のみ/乙…「縮め」1イとの複合で画を縮めて接合)

(甲) 江江江 比比比 (β Pマ) 毛もも (乙) 衣衣衣 久久久 左左左 天天天 奈奈奈

奈奈奈 尔尔尔 者者者 者者者 不不不 遠遠遠

(ロ) 後の画を延長して 曾そや 天1らで 不ふら

(ハ) 前の画を延長して(甲…「の」形/乙…その他)

(甲) (安安安) (支支支) (散散散) (奴奴奴) 奴奴奴 波はは 不1ふ 美みみ (爲為為)

(女女女) (乙乙乙)

(2) 交叉する画を互いに接合する

(イ) 右側 春春春 天1天六 (者者者) 比比比 美みみ 无无无 毛1毛も 乎乎乎

(ロ) 左側 曾曾曾 多々々

前の画の終わりと後の画の始まりを連続させる。これも「繋ぎ」と同様、筆の上げ下げや起筆・収筆の動きを省く手法である。「繋ぎ」「接ぎ」の境界は曖昧であるが、ここでは、元の点画に無い連綿線等が加わるものを「繋ぎ」とし、変形する元の部分に点を含まず且つ、連綿線が生じないものを「接ぎ」と分類した。1ロ・1ハのような画の延長は連綿線とは見なさないこととする。1イは、平仮名では「縮め」1イと合わせ、画を短くした上で接合することが多い(1イ乙)。

【三】省き(省去)

(1) 画の終わりを省く

(イ) 「フ」形の鉤 安安安 曾曾曾 (波波波)

(ロ) 「レ」形の鉤 安ああ 計けい 女めめ

(2) 画の始めを省く

(イ) 横画 能ぬれ 爲るわ

(ロ) 縦画 祢ねれ 波波波 見見見

(ハ) 斜画 毛<sub>2</sub>もも 利<sub>1</sub>りり 利<sub>2</sub>りり 和れわ

(ニ) 点 无えん 毛<sub>1</sub>いん

(3) 中間の画を省く

(イ) 点や画を避けて書く 也やや 由ゆゆ 利<sub>2</sub>りり

(ロ) 経路上の画を書かない 那れれ 祢ねね 良らら 礼れれ

要素を省いて書かない手法である。2は上字からの連綿線を承けた影響で省かれるようになったと思われるものが多い。連綿した上で無くなったと想定すると、「均し」とも取れる。3口は連綿していた部分を連綿しなくなるもの。

草書の成立過程では、要素を丸ごと省略する「省法」が最重要だと陸錫興は指摘するが、平仮名では字源の漢字に草書などの既に簡略な形が選ばれているため「省法」は少ない。省くといっても「均し」を推し進めて点画が併合されていった結果、ある部分が省かれたように見える形に至ったものや、画と画の間にあつて省いても字全体の輪郭が崩れないような部分が自然に消失していったような、「均し」と同様の意識によるものが多いように思われる。そのように見ると、意図的に字の一部を省き去る、漢代草法的な意味での「省法」は平仮名には稀である。この平仮名の特徴は、片仮名の大半が省画によって出来た字体で占められているのと好対照をなしている。

#### 【四】約め(簡約)

(1) 複雑な画を点に約める 那ぬれ 留るる

(2) 点画を軌道に代替させる 幾い、い 末ま、ま 武む、む

複雑な形を簡略な形に置き換える手法である。数は少ない。筆者の旧稿や佐野光一は「省」(省法)に当てているが、陸錫興の分類基準に従えば「簡法」に当てべきであろう。資料が増加して分析を細かくできるようになれば、「均し」などによって説明できるようになり、項目が不要になるかもしれない。たとえば、「る留」と同じ「×」の部分を持つ「た多」の変化を表によってたどると、「×」が簡略化される過程は「約め」以外の要素で説明できる。ただし、「る留」に関しては、空海の筆と伝称されるが唐人の筆とおぼしい「新撰類林抄」の草書に「×」部分を点にした形がある(「榴」も同形)。

### 【五】縮め(短縮)

(1) 画を短くする

(イ) 直線(甲…直線を短縮/乙…直線を短縮の上「接ぎ」1イで画に接合/丙…曲線の直線部分を短縮)

〈甲〉久々々 世<sup>2</sup>々々 末<sup>1</sup>末<sup>1</sup> 无<sup>1</sup>ええ 武<sup>1</sup>武<sup>1</sup> 毛<sup>1</sup>毛<sup>1</sup> 乎<sup>1</sup>乎<sup>1</sup> 乎<sup>1</sup>乎<sup>1</sup>

〈乙〉衣<sup>1</sup>衣<sup>1</sup> 久<sup>1</sup>久<sup>1</sup> 左<sup>1</sup>左<sup>1</sup> 尔<sup>1</sup>尔<sup>1</sup> 者<sup>1</sup>者<sup>1</sup> 者<sup>1</sup>者<sup>1</sup> 不<sup>2</sup>不<sup>2</sup> 遠<sup>1</sup>遠<sup>1</sup>

〈丙〉己<sup>1</sup>己<sup>1</sup> 知<sup>1</sup>知<sup>1</sup> 良<sup>1</sup>良<sup>1</sup> 毛<sup>1</sup>毛<sup>1</sup> 毛<sup>1</sup>毛<sup>1</sup>

(ロ) 曲線 幾<sup>1</sup>幾<sup>1</sup> 奈<sup>1</sup>奈<sup>1</sup> 保<sup>1</sup>保<sup>1</sup> 末<sup>1</sup>末<sup>1</sup> 利<sup>2</sup>利<sup>2</sup> 留<sup>1</sup>留<sup>1</sup>

(2) 画を点にする 可<sup>1</sup>可<sup>1</sup> 己<sup>1</sup>己<sup>1</sup> 太<sup>1</sup>太<sup>1</sup> 天<sup>1</sup>天<sup>1</sup> 奈<sup>1</sup>奈<sup>1</sup> 无<sup>1</sup>无<sup>1</sup> 毛<sup>1</sup>毛<sup>1</sup> 毛<sup>1</sup>毛<sup>1</sup>

也<sup>1</sup>也<sup>1</sup> 与<sup>1</sup>与<sup>1</sup> 良<sup>1</sup>良<sup>1</sup> 乎<sup>1</sup>乎<sup>1</sup>

画を短くすればそれだけ筆記の総距離を節約できる。ところが、長い画ほど、一文字の全体の造形的特徴を決定づける主画になっていたたり、全体の均衡を支える役割をしていたりする。そのため、それを短くすると、字の本来の結構が崩れ、概形(外形。幾何学的な図形などで説明される字の輪郭の概観)や字の大きさの変容を伴うことが多い。たとえば、「た太た」は「大」と「、」との上下の組み合わせだったのが「十」と「二」との左右結構のようになり、「え衣え」<sup>1</sup>「く久く」<sup>1</sup>「ち知ち」<sup>1</sup>「は者者」<sup>1</sup>「ら良ら」<sup>1</sup>「り利り」<sup>2</sup>などは概形が縦長に変化、「か可の」<sup>1</sup>「己己」<sup>1</sup>「な奈な」<sup>1</sup>「る留る」<sup>1</sup>は、この

図ではわかりにくいですが、字の大きさが小型化、「を遠をを」は重心が上方から下方へ移動、などといった例が見られる。

なお、画が短くなったことを判断するのに、ここでは、おおよそ字中の他の画との長さの比に顕著な変化が見られるものを明確な例と認めて挙げたが、画の長さの相対的な比較がしにくい場合や字中の画が総じて短縮した場合については取り上げきれない。たとえば、「さ散」「ぬ奴」「よ与」などの一回転する結びの部分は、円の内の余白が潰れかねないほど小さくなる。また、本稿の表では字の大きさは表現できていないのでわかりにくいですが、平仮名では「ぬ奴」が横長で大きい字なのに対して「め女」は小さく書かれる字で、後者は草書に比して明らかに字の大きさが小さくなっている。画が短縮されて円の径が狭くなった結果と捉えることができるが、そのことは「め女」だけ見ても気づきにくい。ここでは単体で見ても明瞭にわかる例だけ「縮め」に数えたが、こうしたことから、筆画が短くなる傾向は、平仮名全体に亘って起こっているであろうことが推測できる。

漢字の行草ではあまり見られなかった、字の大小という要素も平仮名全体の筆画の短縮に伴って起こったと思われる。現代の活字体の平仮名は、どれも方形に収まる形で等しい大きさに作ってあるが、本来、平仮名は字の大小によっても識別される。たとえば、酷似する「わ和」と「り利」とは、見分ける上で大きさの違いが重要になる。「か可」と「の乃」も大きさの違いをまだ意識していない初学者の間違えやすい。画の短縮によって生じた字の大小差が、平仮名の各字体の個性になるのである。

このように考えると、「縮め」は、概形や大小の変化など字体の結構に大きな変化をもたらした要素として、「均し」に並んで平仮名にとって重要な変形法と評価できよう。

## 【六】均し（平均）

(一) 転折を通らない

(イ) 弧にする

以<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub> 江<sub>レ</sub>江<sub>レ</sub> 加<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub> 幾<sub>レ</sub>幾<sub>レ</sub> 己<sub>レ</sub>己<sub>レ</sub> 數<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub> 會<sub>レ</sub>會<sub>レ</sub>  
多<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub> 乃<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub> 毛<sub>レ</sub>毛<sub>レ</sub> 良<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub> 礼<sub>レ</sub>礼<sub>レ</sub> 呂<sub>レ</sub>呂<sub>レ</sub> 和<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>

(ロ) 平坦にする

衣<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub> 江<sub>レ</sub>江<sub>レ</sub> 支<sub>レ</sub>支<sub>レ</sub> 之<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub> 曾<sub>レ</sub>曾<sub>レ</sub> 多<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub> 多<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>  
知<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub> 天<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub> 奈<sub>レ</sub>奈<sub>レ</sub> 奈<sub>レ</sub>奈<sub>レ</sub> 祢<sub>レ</sub>祢<sub>レ</sub> 能<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub> 波<sub>レ</sub>波<sub>レ</sub> 者<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub> 比<sub>レ</sub>比<sub>レ</sub>

保<sup>1</sup>保保保 保<sup>2</sup>保保 保<sup>2</sup>保保 美みみ 无ええ 毛<sup>1</sup>毛毛 与ちち 利<sup>2</sup>利り  
礼れれ 遠きき 遠きき

(ハ) 縦三段 散散散 須<sup>1</sup>比<sup>1</sup> 徒徒徒 那那那

(三) 横三段 ツ<sup>1</sup>ツ<sup>1</sup> 留<sup>1</sup>留<sup>1</sup>

(2) 転折を方折から円転にする

(イ) 一箇所〔甲…左回りの左部／乙…右回りの右部／丙…右回りの左部／丁…左回りの右部／戊…右回りの下部／己…左回りの下部〕

〔甲〕江江江 己己己 左左左 左左左 之<sup>1</sup>之<sup>1</sup> 数数数 春春春 世<sup>1</sup>世<sup>1</sup> 世<sup>2</sup>世<sup>2</sup>  
會<sup>1</sup>會<sup>1</sup> 多<sup>1</sup>多<sup>1</sup> 天<sup>2</sup>一<sup>1</sup>て 止<sup>1</sup>とと 止<sup>1</sup>とと 能<sup>1</sup>能<sup>1</sup> 者<sup>1</sup>者<sup>1</sup> 无<sup>1</sup>无<sup>1</sup> 武<sup>1</sup>武<sup>1</sup>

留<sup>1</sup>留<sup>1</sup> 礼れれ 遠きき

〔乙〕己<sup>1</sup>己<sup>1</sup> 散散散 奈<sup>1</sup>奈<sup>1</sup> 奴<sup>1</sup>奴<sup>1</sup> 祢<sup>1</sup>祢<sup>1</sup> 祢<sup>1</sup>祢<sup>1</sup> 保<sup>2</sup>保<sup>2</sup> 美<sup>1</sup>美<sup>1</sup> 也<sup>1</sup>也<sup>1</sup>

留<sup>1</sup>留<sup>1</sup> 礼れれ 乎<sup>1</sup>乎<sup>1</sup> 遠<sup>1</sup>遠<sup>1</sup>

〔丙〕奈<sup>1</sup>奈<sup>1</sup> 乃<sup>1</sup>乃<sup>1</sup> 能<sup>1</sup>能<sup>1</sup> 美<sup>1</sup>美<sup>1</sup> 武<sup>1</sup>武<sup>1</sup> 由<sup>1</sup>由<sup>1</sup> 留<sup>1</sup>留<sup>1</sup>

〔丁〕世<sup>2</sup>世<sup>2</sup> 止<sup>1</sup>とと 〔戊〕奈<sup>1</sup>奈<sup>1</sup> 不<sup>1</sup>不<sup>1</sup> 〔己〕世<sup>2</sup>世<sup>2</sup>

(ロ) 「小」形を結びに 奈<sup>1</sup>奈<sup>1</sup> 尔<sup>1</sup>尔<sup>1</sup> 祢<sup>1</sup>祢<sup>1</sup> 保<sup>1</sup>保<sup>1</sup> 末<sup>1</sup>末<sup>1</sup>

(3) 曲線を直線的になだめる 之<sup>1</sup>之<sup>1</sup>

転折をなくすという見方をすれば「簡法」より「省法」にも擬えられるかもしれない。1は軌道が転折を無視するように通り抜ける例、2は転折の位置に沿った軌道になる例である。また、1と2のどちらの均し方をするかによって字体の分化が見られるものもあり、「え江江江」「す數<sup>1</sup>数<sup>1</sup>ああ」「す春<sup>1</sup>春<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>ま」「そ會<sup>1</sup>會<sup>1</sup>そ<sup>1</sup>そ」「も毛<sup>1</sup>毛<sup>1</sup>ん<sup>1</sup>ん」などの例がある。3は特殊で、「し之」の右へ屈曲する部分が直線化した書き方が、十世紀以降見られるようになる。

「繋ぎ」や「接ぎ」によって点画を繋ぎ合わせると転折が生じるから、「均し」はこの二者を経た仮名字形に対して効果がよく發揮

される。適用された字や回数も多く、平仮名全体に広く使われたことがわかる。これによって、元々直線的な短い画の連続であった部分が一本の長い曲線へと変化し、やがて、平仮名を構成する筆画が曲線を主体とするものとなる「筆画の円転化」が確立することになる。

以上の六法の分析は、現時点で確認できる字例に基づいて、筆者が合理的に説明しやすい変遷過程を想定して行ったものである。現存資料で埋まらない部分は推測を含んでいるため、今後資料が増加して実際の変遷過程が解つたり、一層適切な分析方法が考え出されれば、修正を要する。しかし、おおよその傾向はこれによって十分捉えることができよう。

なお、従来、平仮名の字形の成立過程において、筆順の変更が起こっていると指摘されている。たとえば、矢田勉は、平仮名の字体につき、「多く、漢字の正統的な草書の範囲を逸脱し、減画や筆順の変化などを蒙っているが」<sup>19</sup>と説いている。佐野光一は、平仮名字体の成立過程として「連続」「省略」「簡略」と並べて「筆順変化」を挙げ、平仮名や草仮名で筆順の異なる複数の字体が存在する「お於、お、お」「そ所、そ」「ち千、ち」「こ古、こ」「を乎、を」「る井、る」の例を、簡略化の過程で筆順を変えたものと説明している<sup>12</sup>。しかし、本稿で検討した範囲では、筆順の変化を想定しなければ説明できない字は見当たらない。佐野光一が挙げる例も、崩しの過程で筆順が変化したものではなく、字源となる複数の漢字字体それぞれの筆順の違いに由来するものと見るべきであろう。

## 六 平仮名成立における「字形の簡略化」の意義

以上の分析に基づいて、平仮名の字体の特徴や、平仮名字形の発達と平仮名成立との関係を考える。

まず、平仮名字体の中に漢字の形からあまり乖離していないものがあることに關して、平仮名の定義の問題を取り上げる。従来、平仮名の字体の特徴といえば、「もとの万葉仮名の字体が判明しないような形となった」(築島裕)<sup>20</sup>というように見なすのが一般的であった。そこから近年では、平仮名発達の動機が、漢字本来の字義を想起させる「表意性」を払拭して純粋な表音文字になるために、漢字からの視覚的な乖離を目指したことにあるとする説も唱えられた。しかし、以前批判した通り<sup>6</sup>、「もとの万葉仮名の字体」に行書

や草書が含まれることを踏まえて考え直すと、平仮名の中には、さほど元の漢字から乖離していない字も少なくないことがわかる。特に、「お於」「け計」「せ世1」「せ世2」「に仁」「ぬ奴」「ふ不1」「み見」「め女」「や也」「る爲」は、元の字との印象の違いが乏しい。このことから、表意性の払拭という動機を平仮名全体に当てはめることはできない。筆者は、平仮名が発達した動機は、一般的な見解に同じく、日本語の文章を書きやすくするためだと考えるが、右の例の場合は、漢字の形が既に簡単であったために、大きく簡略化するに及ばなかったと考えるのが妥当である。

また、従来、個々の字の形が後世の平仮名の形と一致しているか否かに拠って、平仮名の成立を判断する見方がある。たとえば、藤原有年筆「讃岐国司解端書」(有年申文)の仮名について、万葉仮名や草仮名に一致する字体が見られるとともに、「お於」「ふ不」などが後世の平仮名の形と一致していることを以て(表参照)、それらを既に平仮名になった字と見る向きがあった。池田和臣は、更に進んでこの資料を平仮名・草仮名・万葉仮名を混ぜた書き方だとする見解を示している。

かなの変遷史の実態は、すべて万葉がな書き↓すべて草がな書き↓すべて平がな書きというように変化したわけではないのである。このことは草がなの最も古い資料とされる有年申文を見ればすぐに分ることである。有年申文には、万葉がなの書体の文字、万葉がなを草体化した草がな書体の文字、万葉がなの漢字字母が分らないくらいに極草化された平がな書体の文字、これらがまぜこぜに書かれている。最も古い草がな資料の段階からすでに、三つの書体が混用されているのである。つまり、画数が少なく簡略化しやすい文字はすぐに平がな化し、画数が多く一気に極草化できない文字は草がな体で書かれ、これらが入り交ざって用いられていたのが、草がなが用いられるようになった段階のかなの運用の実態、かなの字姿の実態なのである。〔21…11頁〕

この引用の中で、万葉仮名(真仮名)・草仮名(半平仮名)・平仮名の三つの「書体」の区別を、個々の字体の簡略度合いの差によって分けているように、一般的には、三者の違いは字体の違いとして説明されることが多い。しかし、「お於」「ふ不」といった字は先に挙げたように、そもそも元の漢字から平仮名までの変化が乏しい字であるから、後世の平仮名の形と一致することを理由に、これらを直ちに平仮名と判断することはできない。平仮名とそれ以前とを、形の違いによつては区別することのできない字があるのである。我々が一般的に平仮名と認識する字には、このように、漢字と乖離した字も酷似した字も含まれるため、平仮名の成立を判断するための統一的な基準を、個々の字の形が漢字の形から乖離しているかや、後世の平仮名の形と一致するか、といったことに求めることはできない。

そもそも平仮名の字形の変化は元の漢字から連続的であり、また、字ごとに変形の内容や幅、期間が異なるため、個々の字について、ある特定の形になったら平仮名になったと見なす、というような境界を個別に指摘するのは困難である。仮に一つ一つの字についてそのような文字種・書体の段階分けを設けたとしても、そこに平仮名全体に亘って当てはまる共通の特質を見出だせなければ、平仮名の文字体系としての成立やその独自性を明確にできないであろう。

筆者は、平仮名成立の本質は、単に簡略化された特有の字体が生まれたことにあるのではなく、文字構造全体において、日本語文を表音的に書くのに適する形態的特質を獲得した、独自の文字体系として確立することにあると考える。筆者のいう「字形の簡略化」「筆画の円転化」「連綿の定式化」の三点は、平仮名の体系全体上の構造的・書法的な特徴を指摘したものであり、字体はその中の一要素に過ぎない。平仮名の成立を判断する上で、「字形の簡略化」は字ごとに具体的な過程が異なるため、統一的な判断基準にしがたいのに対し、「筆画の円転化」や「連綿の定式化」は一般性を持ち、あらゆる字に亘って起こる現象であるため、文字の体系的変化の判断基準になる。ただし連綿については、平仮名は続け書き（連綿）で書かれるのが一般的であるが、いろは歌など放ち書きの様式も存在するため、連綿の有無自体は平仮名であるか否かの明確な基準にはしがたい。一方で筆画は、あらゆる文字を構成する基本の要素であり、続け書き・放ち書きに拘らず常に認められる要素であるから、一般性が高く平仮名の成立段階を判断する上で最も有用な指標になる<sup>〔3〕</sup>。

そこで最後に、「字形の簡略化」が、平仮名の完成を象徴する「筆画の円転化」の達成へとどう繋がっているかを考える。そもそも、「字形の簡略化」の動機は、日本語を書きやすくすることにあると考えられるが、形を崩すという手法は、当初、漢字の行草の書法に学んだものであろう。半平仮名の初期から多く見られる「繋ぎ」「接ぎ」は、中国の行草の速書きによく見られるものである。ただし、行草では速書きに際して随意にこれらが行われるに過ぎず、速書きでない場合には筆画を続けない典型的な書き方が守られる。仮名では筆画の続け書きが固定化していくことで、元の漢字字体の典型を離れていき、それによって慣習化した形が、更なる簡略化を進めるための基盤になる点が重要になる。

「繋ぎ」「接ぎ」が達成された段階では、まだ行草の原理を離れておらず、日本語を表音的に書く利便性はさほど高くなっていない。「縮め」によって画の総距離を縮め、「均し」によって転折を無くして複数の画を長い一本の画に統合することで、形が著しく簡素化されたのである<sup>〔3〕</sup>。草書は簡略化されているといっても、漢字の数千種類もある字を区別するのに、示差的な特徴を保っていなければ

ならなかったため、平仮名に比べ結構が複雑で画数も多い。日本語は音節の種類が少なく、かつ、仮名では清濁や音調を書き分けなかったから、音節文字として区別すべき字の種類は少なく済んだ。平仮名には異体もあるが総数は漢字に比べれば遥かに少ない。そのため、漢字字体の本来の結構を大胆に崩しても識別にさほど支障がなく、「縮め」や「均し」のような大胆な変形を施すことができた<sup>③</sup>。

「縮め」「均し」の二法は、仮名の広い範囲で使われ、漢字の結構を破るのに決定的な働きをした点で、平仮名の成立における独特の重要な要素であると言える。漢代草法では簡略化の対象は点画と偏旁（部品）とに及んだが、平仮名では、字源にそもそも簡単な形が多いため、省略の対象になるような偏旁の要素が乏しいことや、また要素を大幅に省略して視認性が大きく損なわれるのを嫌ったであろうことから、草書の成立上最も簡略化に効果のあった、偏旁の省略（省法の省部件）や代替（簡法）はほとんど行われなかった。結局、平仮名では点画を対象とする簡略化に限られたが、その点画の簡略化法の中で大きな効果を持ったのが「縮め」や「均し」であったと考えられる。

「縮め」も「均し」も、本来は書く労力を削減するための便宜でしかなかったであろう。それが結果的に、字の結構を著しく変化させ、筆画を方折（直線）から円転（曲線）に変化させる効果を生じることとなり、平仮名の形態的な特徴を決定づけたのである。とりわけ重要なのは「均し」の方である。「縮め」は平仮名全体に影響しているといっても個々の字体の特徴を個別に変化させるに留まり、文字形態の一般的性質そのものに革新的な変化を与えたわけではないであろう。一方、「均し」は、多用されることで仮名の中に曲線が増加し、遂には文字構造の基本要素である筆画の性質の根本的な変化である「筆画の円転化」を導いた。「均し」自体は、含まない字もある個別的な現象であるが、「均し」が多くの字に適用されることにより曲線が多く生じて、遂には曲線が平仮名の筆画一般の性質にまで拡張された点に、平仮名の体系全体に対する重要な意義が認められる。「均し」こそ、仮名が漢字の文字構造から逸脱して、平仮名独自の文字構造を定着させる鍵になった要素であるといえる。

注

（一）「草仮名」という呼称の問題については、山田健三の論などを参照〔22〕。筆者の「半平仮名」の呼称は、佐野光一論文による〔12〕。ただし、筆者は独自に定義し、個々の字体に拘らず、文字体系としての平仮名が確立する以前の発達の一段階を指す呼称として使う。佐野光一は草仮名と平仮名との中間的な

字形を指して言っており、筆者の指す、体系としての発達段階のことは「半平仮名及び平仮名体」と称している。平仮名の段階を字形の差異に基づいて定義することの問題点は本稿第六節で指摘する。

(2) 平仮名における画数の減少については、佐野光一が言及している「12」。また、野村正人と村井義洋の研究では、現代の平仮名の字形を対象に、そこに含まれる曲線運動・線の本数・線の長さについての計量的な分析が提示されている「23」。

(3) なお、平仮名の中には、甚だしい簡略化によって、単字では互いに区別ができないほど酷似する形になった字の組もある（「む无」と「も毛」、 「つツ」と「へト」など）。思うにこれは、日本語に多音節の語が多いことから、似た形の字であっても前後の字や文脈から特定しやすかったため許されたものであろう。

(4) 私的な覚え書きとしての用途が中心であった初期の片仮名の場合、書き手自身が読めればよかったので、字を省略するのに、どの字のどの部分を省略するかは書き手の任意で、他の人には一見しただけでは読みにくかった。一方で平仮名は、当初より和文や和歌のやりとりなど社会的な通用を主な用途として発達した文字であったため、簡略化するに当たっては、読み手に伝わるのが重視されて、その字が何の仮名であるかの認識が損なわれるような大幅な簡略化は避けられたと考えられる「6・36～37頁」。完成後の平仮名には、結果的に元の漢字の形から大きく乖離した字も少なくないが、それは簡略化の過程で段々と変化していったものであり、変化がゆるやかであったため、元の漢字は忘れ去られたとしても、どの音に当たる仮名であるかの認識は妨げられなかった。「省き」が大胆に行われると、その同一性の認識が妨げられてしまうであろう。

### 参考文献

- [1] 中山陽介「平仮名成立の諸要件」『万葉仮名と平仮名 その連続・不連続』三省堂、平成三十一年
- [2] 中山陽介「仮名連続成立考」『國學院大學大学院紀要—文字研究科—』第五十一輯、令和二年
- [3] 中山陽介「平仮名の筆画の円転化」『若木書法』二十、令和三年
- [4] 中山陽介「仮名成立史上の西三条第跡出土土器墨書仮名の位置付け」『國學院雜誌』第百十七卷第七号、平成二十八年
- [5] 中山陽介「平仮名の字母の体系化」『国語研究』第八十四号、令和三年
- [6] 中山陽介「平仮名の字源と草書」『國學院雜誌』第百二十二卷第九号、令和三年

- [7] 陸錫興『漢代簡牘草字編』上海書畫出版社、一九八九（平成元年）
- [8] 陸錫興『漢字形體史』上海教育出版社、二〇二二（令和四年）
- [9] 佐野光一『神鳥傳』の草法』『國學院雜誌』第百一卷第十一号、平成十二年
- [10] 佐野光一『長沙東牌樓簡牘の草法』『國學院雜誌』第百八卷第十号、平成十九年
- [11] 佐野光一『天長市出土木牘の書法——漢隸の成立と草書の成長』『若木書法』十、平成二十三年
- [12] 佐野光一『草仮名・平仮名の文字形體』『若木書法』十六、平成二十九年
- [13] 伏見冲敬（編）『角川書道字典』角川書店、昭和五十二年
- [14] 杭迫柏樹（編）『王羲之書法字典』二玄社、昭和五十二年
- [15] 北川博邦（編）『日本名跡大字典』角川書店、昭和五十六年
- [16] 飯島太千雄（編）『空海大字典』講談社、昭和五十八年
- [17] 奈良文化財研究所（編）『改訂新版 日本古代木簡字典』八木書店、平成二十五年
- [18] 中山陽介『自家集切』『貫之集』の仮名』『若木書法』二十一、令和四年
- [19] 矢田勉『平仮名』『日本語学大辞典』東京堂出版、平成三十年、782～786頁
- [20] 築島裕『平仮名』『日本語学研究事典』明治書院、平成十九年、381～382頁
- [21] 池田和臣『古筆資料の発掘と研究』青簡舎、平成二十六年
- [22] 山田健三『草仮名』名義考』『国語語彙史の研究』三十二、和泉書院、平成二十五年
- [23] 野村正人／村井義洋『平仮名の字形と運筆の関係』『近畿大学工学部研究報告』第五十六号、令和元年